

図書館協力の現状および課題

土屋俊
(千葉大学)

話題

- 現状(脇道付)
 - 国公立大学協力委員会
 - 図書館間相互貸借の状況と問題点
 - 電子ジャーナルコンソーシアムの展開と問題点
- 課題
 - 外部環境の変化の認識(「大学改革」と「電子化」)
 - ILLからDDへ(コストと著作権)
 - 電子ジャーナルとの関係
 - コンソーシアムの「コンソーシアム化」(2つの意味)
 - 書誌ユーティリティの将来
 - 研究コミュニティとの連携

図書館間協力の必要性

- 金と人が減るこれから、必要性はこれから増大する
 - 共同購入(分担購入)と相互利用
 - 共同保存と相互利用
 - 共同研修
 - 共同システム構築(書誌、ワンストップポータル、決済等)
- 大学図書館としての共通課題の存在の自覚
設置形態の枠を越えた協力の必要性
 - NACSIS/NIIとの関係(JSTとも?)
 - 著作権等についての考え方
 - 海外との関係(アメリカ、韓国、...)

今回は「大学図書館間協力」に限定するが、より広めの視野としては、

- 地域における館種を越えた協力あるいは情報提供
 - 大学図書館の優位性：購買力は2倍以上！
 - 共同購入(例：浦安市立図書館と明海大学図書館)
 - 相互貸借・相互利用
 - インターネット社会におけるmediator排除傾向と図書館の位置づけ—貸本屋を越えた公共図書館？
 - 大学図書館の市民開放との関係
 - 共同電子化(地域資料等)：大学はできる
- 国立国会図書館と大学図書館との協力と競合
 - カタログと二次情報
 - 館外サービス(10:1の現状)
- 学校図書館、病院図書館への情報提供

日本における枠組みとしての 「国公立大学図書館協力委員会」

- **会員(membership)組織ではなく、調整組織**
 - 国立大学図書館協会(委員館4館): 国立大学 +
 - 私立大学図書館協会(6館): 全私立大学ではないがほとんど
 - 公立大学協会図書館協議会(2館): 数十館
 - 常任幹事会による迅速な運営(国2公1私2)
 - 略称: 「こっこうし」、「きょうりょくいいんかい」
- 大学図書館の共通問題をすべて扱う傾向が生じている(著作権、電子ジャーナル、NII対応など)**

沿革

- 1980年5月発足
 - 相互利用(文献複写など)
 - 書誌情報ネットワーク(cf. 55年答申)
 - 研修・講習
 - 国立4館、公立2館、私立4館(1999年度まで)
- 旧文部省の肝入りもあった
 - 『協力ニュース』に遠山情報図書館課長の挨拶文
- 20世紀における実績:
 - 相互利用の実施(会計制度の差異を超えて)
 - 日本複写権センターへの対応

主な事業

- 著作権にかかわる国公立大学共通の対応
 - － 当事者協議会への委員派遣
 - － 著作権課等との一本化された窓口
- 図書館間相互協力の枠組み
 - － 図書館間相互貸借(複写・現物)
 - － NII事業との一本化された窓口
 - － 国際協力については、設置者種類ごと(ICOLCへは派遣)
- 研究支援・相互啓発・情報共有
 - － 「協力ニュース」「大学図書館研究」「相互利用便覧」
 - － シンポジウムその他

財政基盤(独立採算)

- 収入

- 「協力ニュース」収益分配金 約10万円
- 「大学図書館研究」収益分配金 約130万円
- その他、5年ごとに「相互協力便覧」収益分配金

- 支出

- 編集委員会費用 約50万円
- 大学図書館研究集会分担金(隔年) 約50万円
 - または、シンポジウム開催費 約25万円

日本図書館協会との関係の見直し??

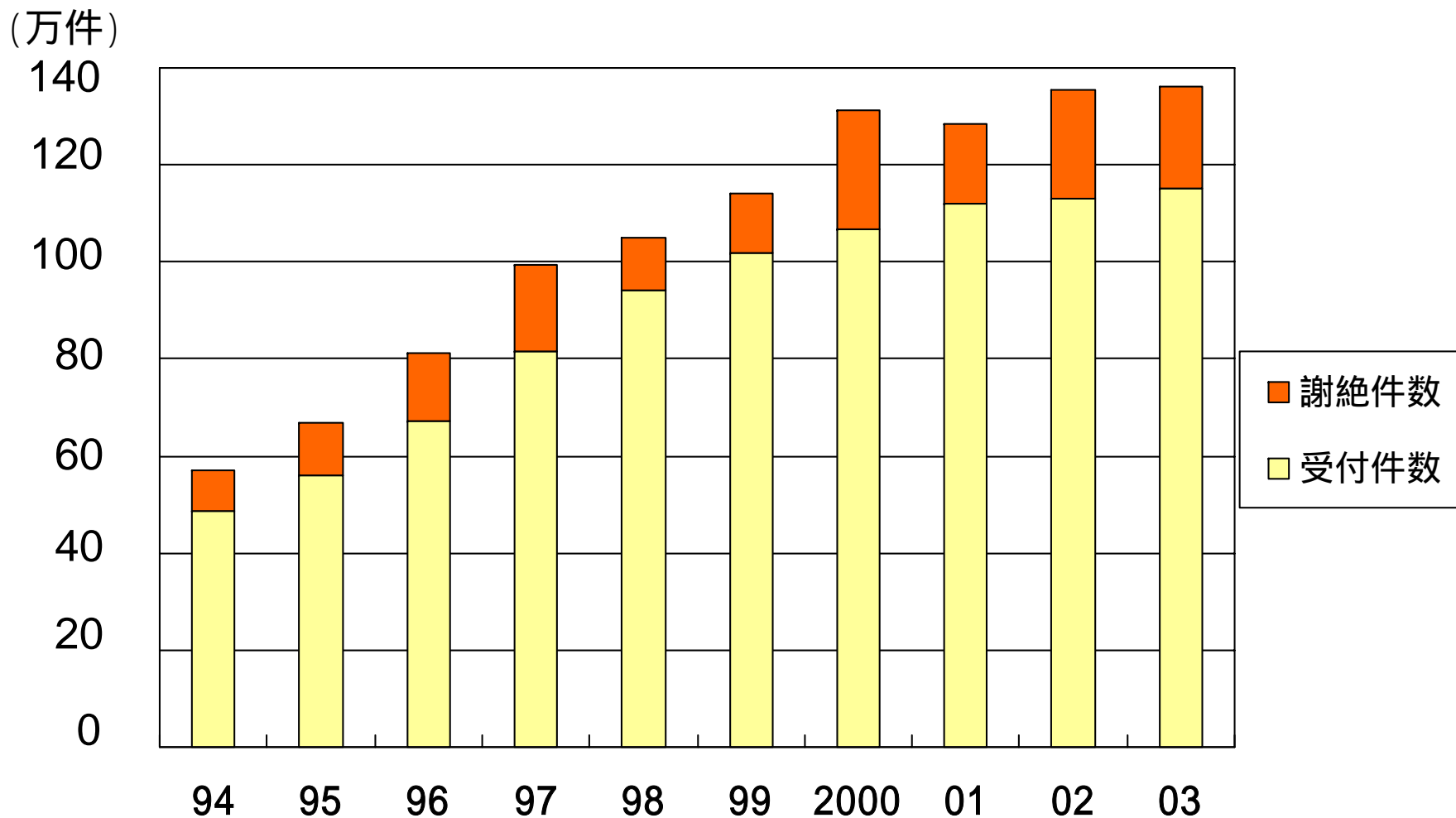
- 会議費、事務費 約9万円

- 事務局: 委員長館の事務が担当

相互貸借の展開

- 1990年代における「順調な」増加
 - － (外国)雑誌論文の複写依頼がほとんど
 - 北米と対極的
 - － NACSIS-CAT/ILLのシステムの普及(1992年から)
 - － 徴収猶予による料金相殺システム(国立大学)
 - － 購読タイトル数の減少に伴うと思われる依頼増
 - － 外国雑誌センター館の役割
- 全体コストの問題
 - 2004年第1四半期相殺処理対象件数:230,903件
 - 相殺処理金額 : 79,462,790円

1990年代における複写依頼の増加 (NACISIS-ILL統計による)



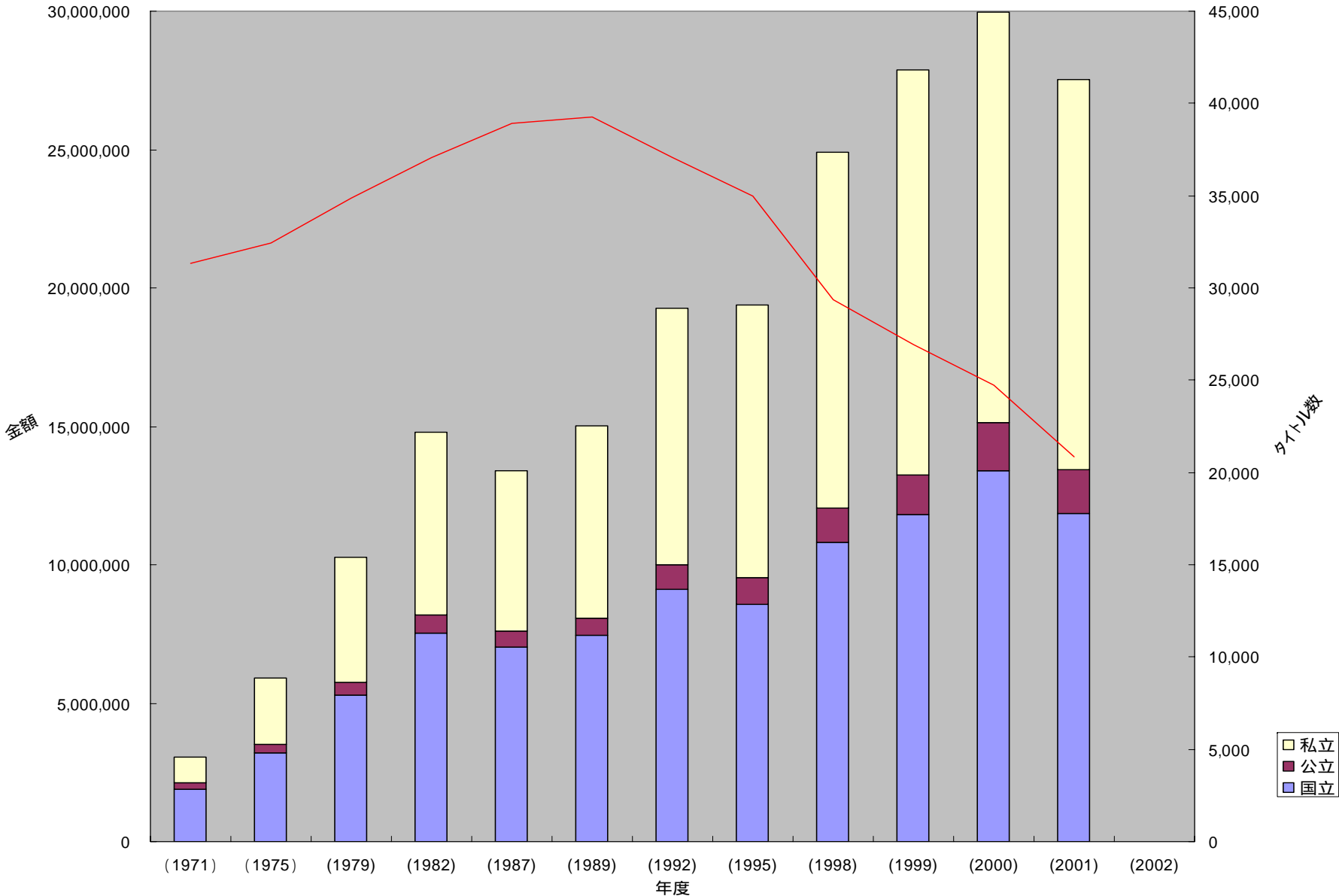
1990年代におけるILLの実態(雑誌:図書、和:洋、分野別)

1)NASCSIS-ILLデータ		1994		1996		1998	
	総数		468,218		637,860		881,786
図書雑誌内訳	図書	21,495	4.64%	29,798	4.72%	40,937	4.69%
	雑誌	442,370	94.48%	594,962	93.27%	820,510	93.05%
	不明	4,353	0.93%	13,100	2.05%	20,339	2.31%
雑誌内の和洋内訳	(和雑誌)	91,752	20.74%	132,887	22.34%	195,375	23.81%
	(洋雑誌)	350,618	79.26%	462,075	77.66%	625,135	76.19%
	(機関)	236		336		554	
2)外国雑誌センター館 分野別							
	医学生物系	489,893	59.87%	518,216	58.75%	593,622	60.75%
	理工学系	201,644	24.64%	198,393	22.49%	177,846	18.20%
	農学系	87,743	10.72%	112,638	12.77%	132,974	13.61%
	人文社会系	38,993	4.77%	52,825	5.99%	72,685	7.44%
		818,272		882,072		977,127	

単位:千円

日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



タイトル数は、国立情報学研究所が管理する「雑誌総合目録」による。購入額は、文部省、文部科学省「大学図書館実態調査」による。

いくつかの問題の解消

- FAX等を利用した送信の無償許諾
 - 2004年3月から
 - 学著協、JCSLと
 - (郵送を含む)ILLそのものについても許諾
- NIIによるILL文献複写等料金相殺サービスの開始
 - 2004年4月から
 - 500機関以上参加
 - 3億規模の決済実施になるはず

現在における問題点

- 依頼と受付のアンバランス
- **ILL自体は赤字**
- 謝絶率の高さ
 - 研究室配架の問題：日本の大学図書館の宿命？

ILL業務の位置づけ

- **電子ジャーナルとの関係**
- **User-Initiatedなドキュメント提供との関係**

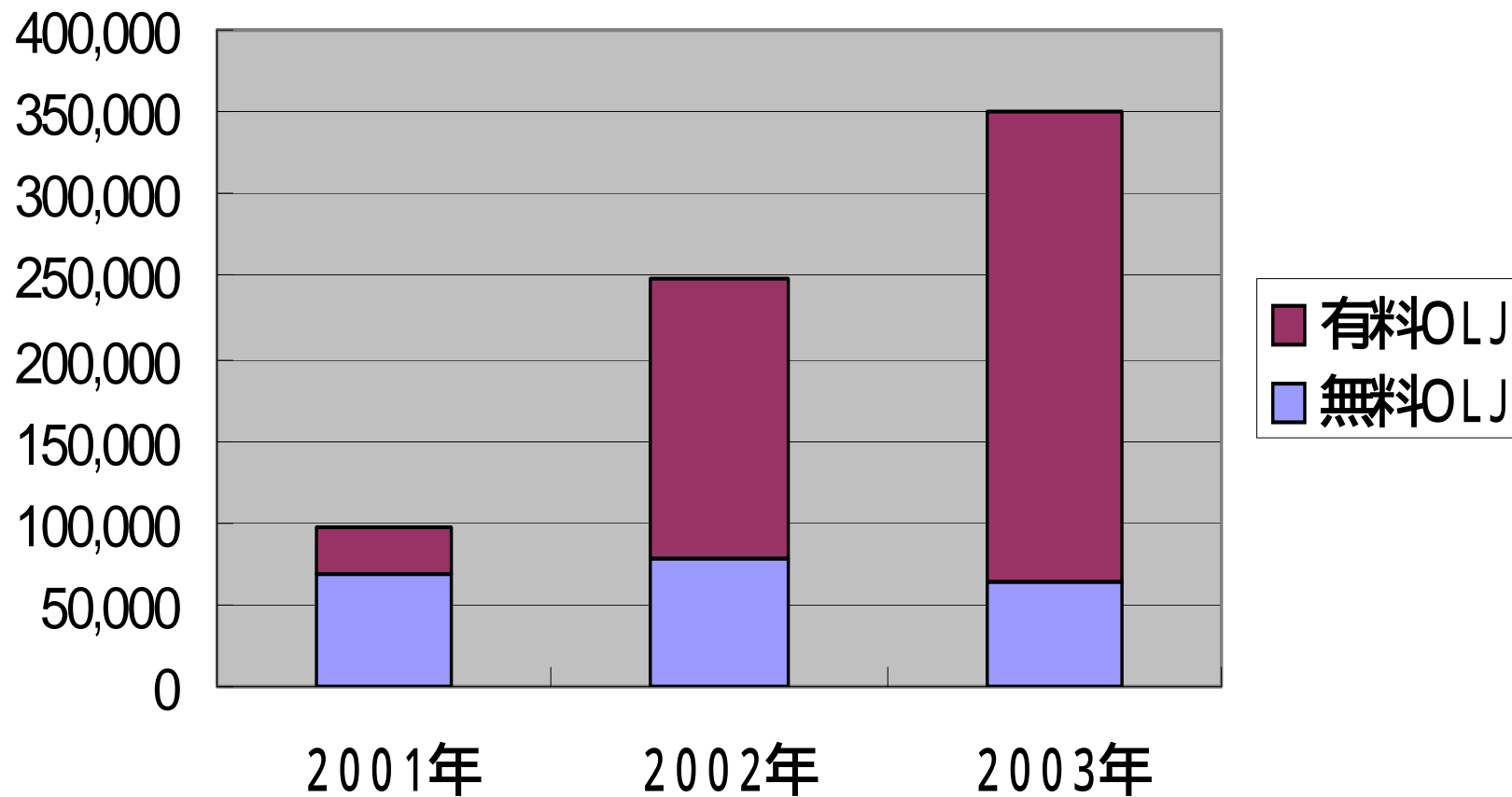
日本ではユーザへの直接送信はまず無理そう

- **コスト比較の問題**

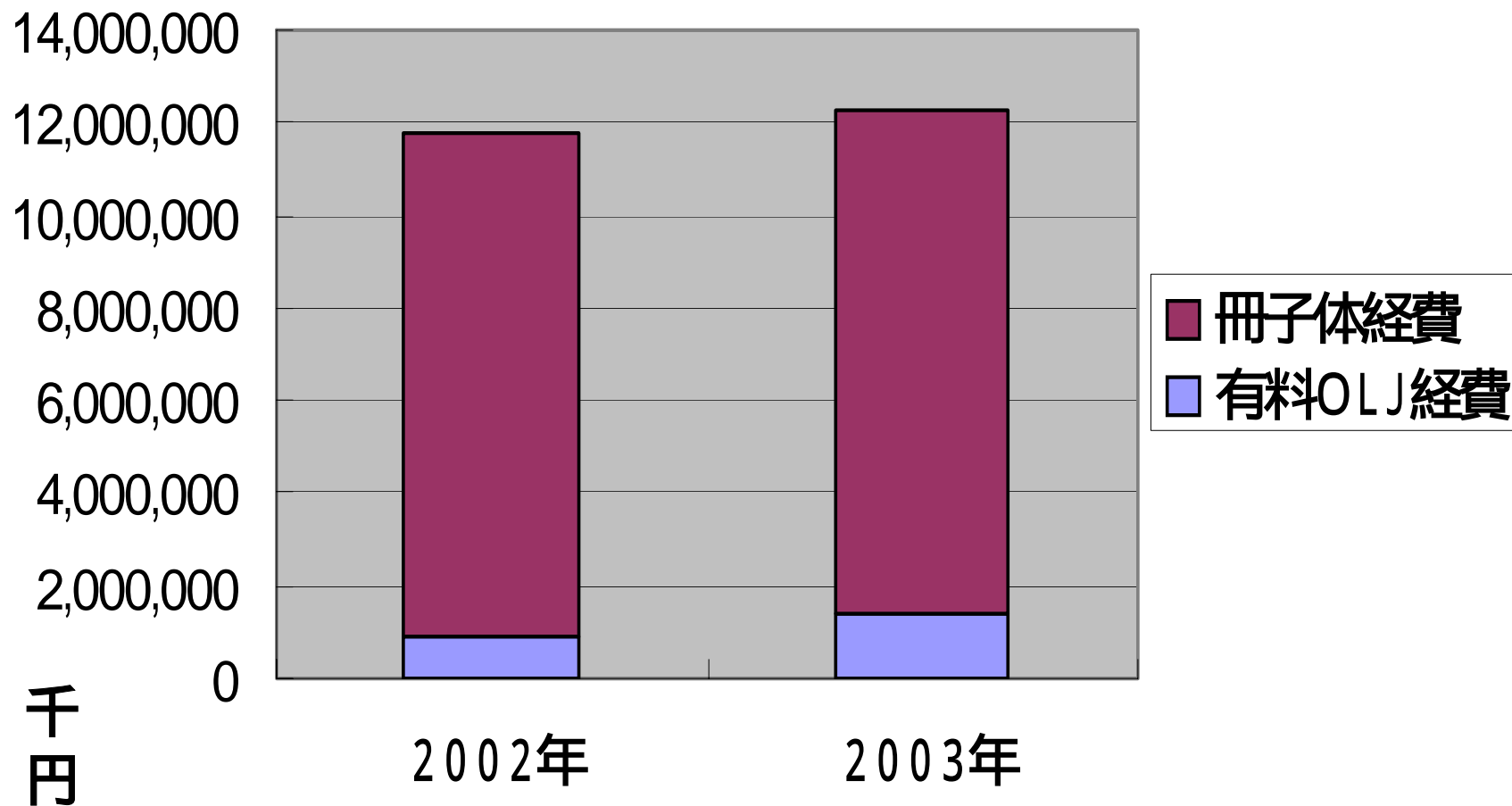
電子ジャーナルコンソーシアム

- 2002年からの契約を念頭において2000年9月設立
- 出版社との直接交渉を原則(当初は、主要5社ターゲット)
- 契約条件の改善(1大学1サイト原則、ILL、学外者利用、
プライス・キャップ等)
- 利用環境の改善(ミラー・アーカイブ設置、利用者講習担
当者研修、統計情報の正確化(COUNTER対応)等)
- 予約購読意思決定システムの改善、「集金」システムの確
立の推進(「全学予算化」等)
- ただし、契約は大学ごと(条件は国立大学全体を一つのコ
ンソーシアムとみなさせる)
- 相当程度の成果:「2002年は(日本の国立大学の)電子
ジャーナル元年」
- 現在40社近くと交渉

国立大学における外国の電子ジャーナル導入状況



国立大学における外国雑誌購入のための経費



図書館サイドからみた変化

- 物品購入から使用許諾へ
 - すべては契約！
- タイトル予約購読からデータベース(パッケージ)へ
 - Big Deal の(一定程度の)妥当性
 - 二次データベースとの連携
- 利用者サービスのバーチャル化
 - ポータルによる誘導、利用環境整備
 - 「保存」「管理」の概念の変化
 - ILLへの影響(急速な減少。1990年代のあだ花?)
- 厳密な利用統計の可能性(COUNTERプロジェクト)
 - 将来のプライシング・モデル
 - 対学内(Value for moneyによる議論)
- 「コンソーシアム」の重要性の増大
 - 購読規模 = 収入規模をめぐる戦い

私立大学における展開

- 医学図書館、薬学図書館の取り組み
 - 国立大学は、中央館による一括契約が徹底
- 70年代進学率上昇と大学政策の影響
 - 私立大学における「研究」の位置づけ
 - 私立大学における理系の位置づけ
- 2003年度からの私学助成による枠の獲得
 - 私情協の登場
- PULCの成立

日本の現在のコンソーシアムの特徴

- A) コンソーシアムの利点(単一館には無理なこと)
- a. スケール・ディスカウント(長期支払い保証) ○
 - b. 共通条件交渉(サイト概念、キャンセル許容、バックファイル等) ○
- B) コンソーシアムの6機能(実際の運用)
- a. 単一交渉 ○
 - b. 単一契約 ○
 - c. 単一インボイス・単一支払い × (1)
 - d. 単一の財布 × (1)
 - e. 書誌・「所蔵」管理 × (1)
 - f. 共同保存(冊子にせよ電子・時期にせよ) △ (2)

(1) ある時期のNIIによるIOP、OUP契約を除く

(2) NII-REO

ILLとコンソーシアムの違い

- 安い
- ILLは、網羅的であり、参加館が増えることにそれ自体メリットある。
- 分散させると負担減、コスト減につながる
- 明らかに図書館サービスとして位置づけられる
- 高い
- 電子ジャーナルは、大学ごとの需要が多様。したがって、参加館の判断が重要になる
- 集中させることによってメリットが生じる
 - 単一支払いはそれだけで安くなる
- 雑誌支出の出所は研究費であり、図書館が見え難い

今後の課題

- 外部環境の変化の認識(「大学改革」と「電子化」)
– 社会 大学ミッションの自覚 図書館機能の見直し
- ILLからDDへ(コストと著作権)
- 電子ジャーナルとの関係
- コンソーシアムの「コンソーシアム化」(2つの意味)
- 書誌ユーティリティの将来
- 研究コミュニティとの連携

「大学改革」= 大学の説明責任

- ちゃんとした高等教育機関への展開
 - 教養教育の見直し
 - 卒業生の「品質保証」
 - 国際的人材市場
- ちゃんとした研究機関への展開
 - 客観的評価
 - 競争的資金
- 社会に開かれた大学
 - 教育資源(図書館資料を含む)の社会還元
 - 研究成果の(直接的)社会還元

社会の電子化

- 情報流通の電子化・デジタル化
 - 社会インフラのデジタル化
 - 図書館のICタグだって関係ある
 - とりわけ、学術情報流通の電子化
 - 学術論文、2次情報のインターネット依存性の進展
- 社会の知識化
 - 知識の値づけ
 - 特許などの価値
 - 流通のコスト負担構造の変化
 - 専門知識の専門家からの開放
 - PLは古いかも。とりわけ医療情報(informed consent)

大学図書館機能への影響

- **教育支援機能**
 - Face Learningであれe-Learningであれ資料
 - 資料利用リテラシーの普及支援
- **研究支援機能**
 - 電子的・ネットワーク的資源へのアクセス確保
 - 研究インパクト・成果保持の機能
- **社会還元支援機能**
 - 所蔵資源の利用促進
 - 研究成果へのアクセス促進

雑誌論文ILLの行方

- 電子ジャーナルの普及によるILLの減少
 - 国立大学で検証
- ユーザへの直接送信
- すでにコストは同じレベル(数百円)
 - 北米ではILLが高い。ヨーロッパではVATが電子ジャーナル普及の問題

ひとつの可能性(3層モデル?)

- 電子ジャーナル・サイトライセンシング
- 電子ジャーナル・Pay-per-View
- ILL(国内・海外)

迅速な展開を阻むもの: 教員の無知

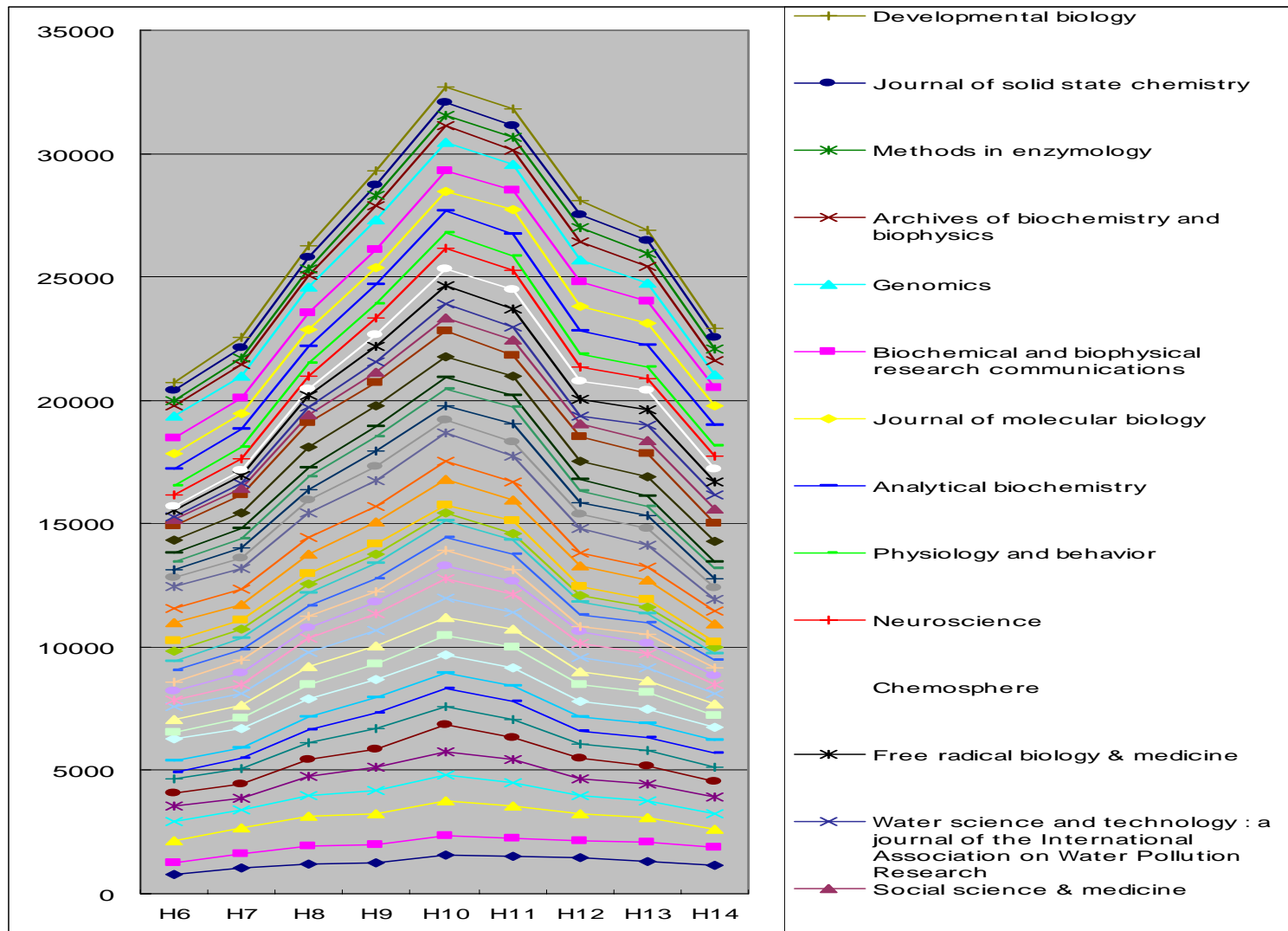
大学図書館を越えた社会貢献としてのILL

- すでに病院への提供は重要な機能
 - 31条問題はたしかにあるかもしれないが、
- いや、31条とは何かを考え直す
 - 31条は権利者の権利を制限する例外条項
 - 図書館に権利を付与しているわけではない
 - 許諾による複製が本来の複製
 - したがって、有償で「調査研究目的」以外の複製を実施することは十分に可能
 - 許諾するのは権利者なので文句は出ない
 - せっかく買った資料が社会に還元される

Elsevier社タイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

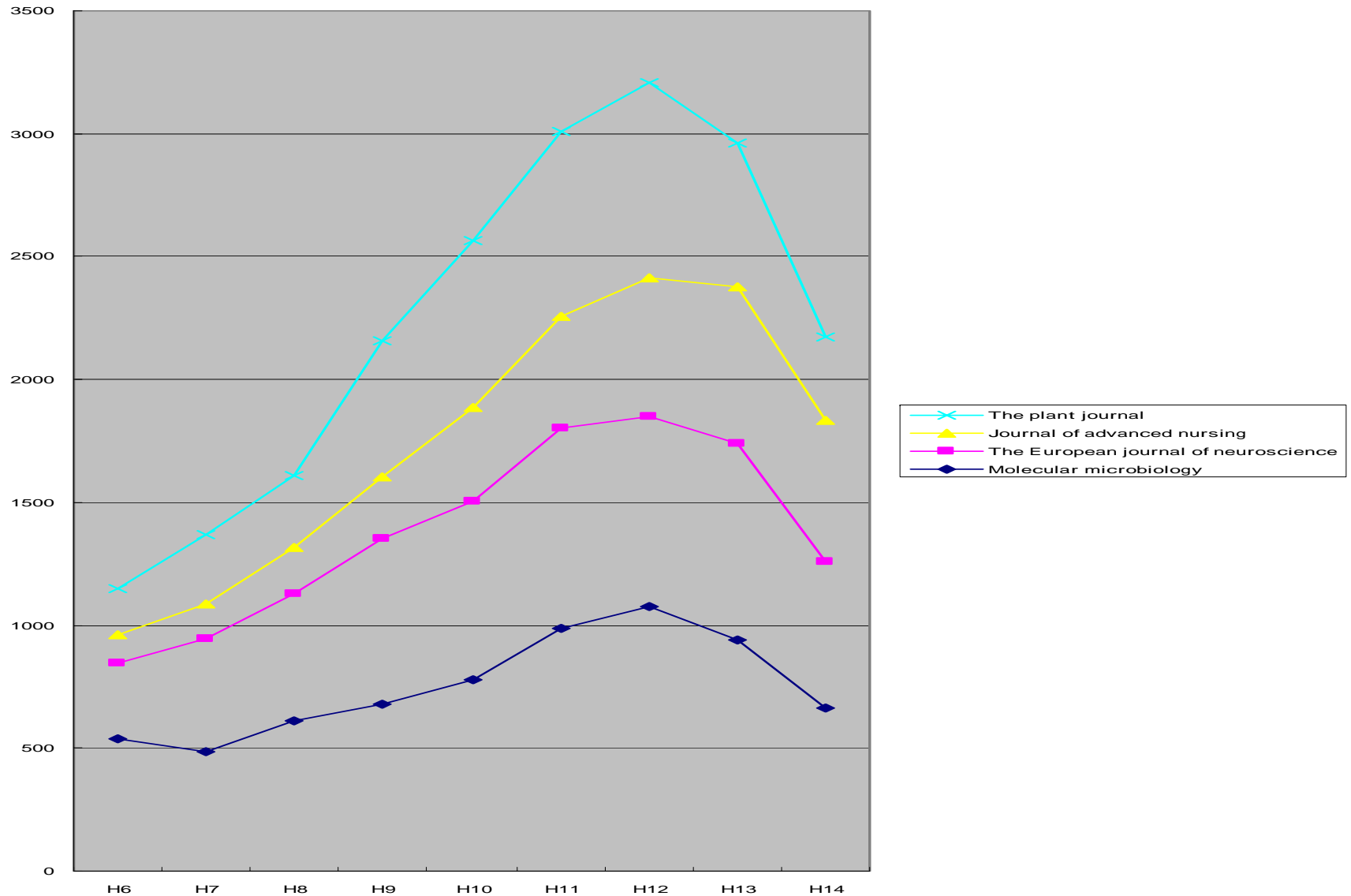
- ・ コンソーシアム形成によってILL件数が急減(1999年はSD21プログラムの全タイトル開放、2002年は国立大学コンソーシアムの形成)



Blackwell社タイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

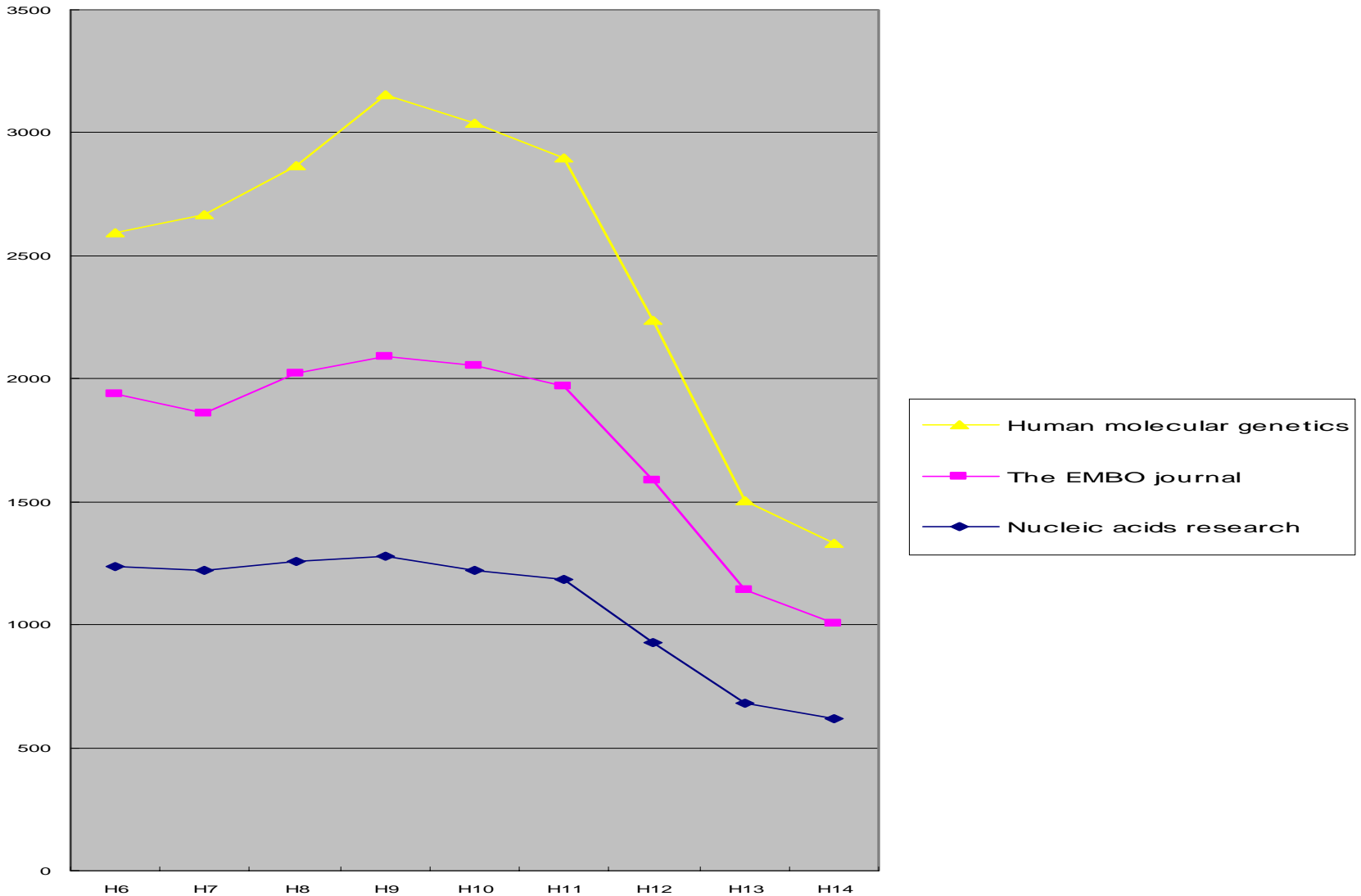
・コンソーシアム形成によってILL件数が急減(2002年の国立大学コンソーシアムの形成の直接的影響)



OUP社タイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

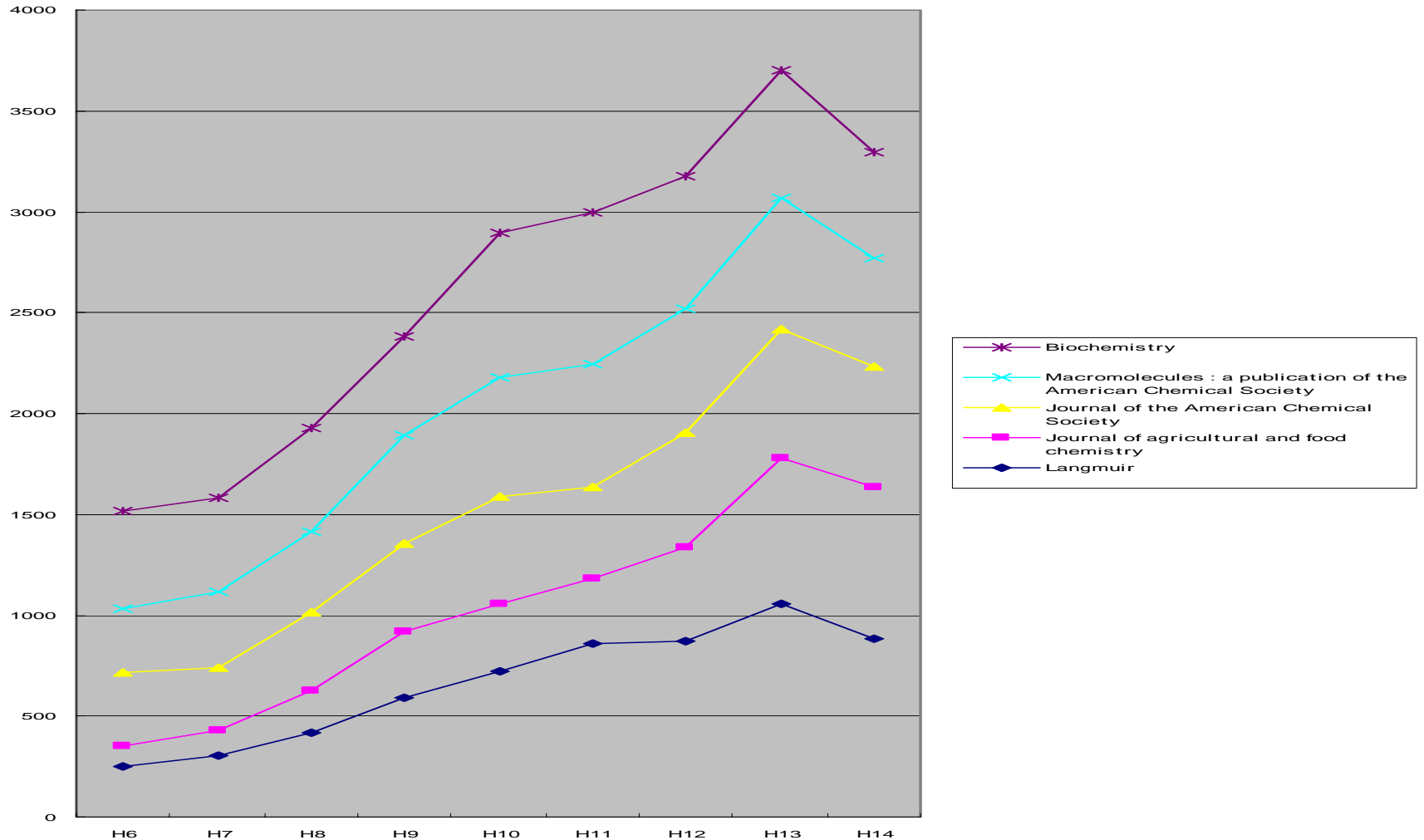
・NIIによる国立、私立、公立を問わないナショナルサイトライセンシング実験
(2001年から2003年)によって急速に減少したケース



ACSタイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

・コンソーシアム形成が遅れたので、2000年以降も増え続けたケース



コンソーシアムのコンソーシアム化

- 第一の意味

- これまで以上に経済的機能を拡充する
 - 単一インボイス・契約・支払い
- これまで以上に自律的な交渉を行う
 - リスクを引き受ける

- 第二の意味

- これまで以上に相互連携を図る
 - JCOLCとしての活動の可能性
- これまで以上に国際連携を図る
 - 図書館コンソーシアムによる特定プロジェクトの支援

書誌ユーティリティの将来

- 電子資源管理システムはいずれにせよ必要
 - 電子ジャーナル管理への支援
 - 論文レベル、データベースレコードレベルでのメタデータ管理への支援 (harvesting)
- 国際相互接続
 - Z39.x ?
 - メタデータ ?
 - 多言語化
- NACSIS-CATはいつまで維持できるか ?
 - NIIでなく大学図書館次第

研究コミュニティとの連携

- 学術情報の秘教性(esotericism)
 - 研究者の情報流通の支援が大学図書館の役割
 - 出版者から「買う」のは、20世紀後半のエピソード
 - 他のモデルを構想する責任
 - **しかし、それは単一館では不可能**
- 研究者における無知 **図書館による啓蒙**
 - 学術情報流通に関して
 - 「インパクトファクター」信仰
 - “Nature”信仰
 - 電子化に関して
 - 「電子ジャーナルは無料」?!?!
 - 「やっぱり紙が絶対必要」(もはや保存機能のみなのに)

要するに

- **大学図書館間協力は今後の最重要課題**
 - 短期的には
 - ILL
 - 電子ジャーナル
 - 書誌ユーティリティ
 - 長期的には
 - 大学における図書館の位置づけ
- **大学図書館を越えた図書館間協力へ**
 - 地域との連携
 - (大学図書館としては) 研究コミュニティとの連携